



TITLE:

セクシュアリティ概念の刷新に向けて ―S・フロイトの精神分析の視点から―(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

古川, 直子

CITATION:

古川, 直子. セクシュアリティ概念の刷新に向けて ―S・フロイトの精神分析の視点から―. 京都大学, 2016, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2016-01-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19391>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	古川 直子
論文題目	セクシュアリティ概念の刷新に向けて ——S・フロイトの精神分析の視点から——		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>近年の社会学における「無定義概念」としてのセクシュアリティ理解は、それが根本においてセックス（生殖）にもとづく現象であるという前提を保持してきた。このようなセックスとセクシュアリティの概念的癒着は、社会構築主義への転回によって導入されたセックス／ジェンダー／セクシュアリティという三つの概念を区分し、「性」を「自然」からラディカルに離床させるというジェンダー／セクシュアリティの社会学的研究の射程そのものを後退させうる危険を有している。本稿はこのような理論的困難に対して、新たなセクシュアリティのモデルを精神分析の視点から提示することを試みた。</p> <p>第1章では、まず従来の精神分析研究におけるセクシュアリティという概念の理解が、近年の社会的議論と同型の問題を抱えていることを論じ、フロイトによるセクシュアリティ概念を規定する基準そのものの変更を検討した。</p> <p>さらに第2章・第3章では、主体を内から脅かす危険としてのセクシュアリティという精神分析独自の視点を考察した。この「内的危険」という視点は、エネルギーの蓄積による「中毒」としての不安の発生を論じた初期情動論を起点としている。すなわち、身体的緊張が心的表象と結びつくことによって質的に分化した情動に変わるという過程が、阻害されたときに不安が生まれるという議論である。そこでは質的に最も未分化な情動、すなわち「情動の通貨」としての不安の理解が示された。この経済論的不安論は、心的に処理できないリビードという観点をつうじて、心的に拘束できないセクシュアリティの外傷性（欲動の危険）への着眼を準備するものであった。</p> <p>欲動（セクシュアリティ）が主体にとっての内的危険であるのは、それが通常の方法では処理できないような大量の興奮をもたらすからであった。それは「快原理の彼岸」に位置づけられるような拘束の作業を要求し、原抑圧はこのセクシュアリティの外傷性に対する防衛手段として規定されていた。</p> <p>心的に処理できないリビードの蓄積（不安）-心的に拘束できないセクシュアリティの過剰（外傷）という視点を引き継ぐ「死の欲動」概念は、内的危険としてのセクシュアリティ論に新たな知見を付け加える。精神分析固有の語義におけるセクシュアリティ（死の欲動）は、欠如した対象との結合を求めるエロースの対立物であり、むしろ「他者への欲望」とは相反するものであった。それは他者という外的対象への志向ではなく、主体を内から破壊する「自己破壊」の快なのである。</p> <p>第4章では、内的危険に対する防衛としての原抑圧を、精神分析の自己物語論という新たな観点から考察した。フロイトは「翻訳」というタームによって、相互に関連</p>			

づけられた表象（記憶）のまとまりとしての自我の構成を論じた。精神分析の自己物語論によれば、自我とは記憶を因果的・時間的に整序することで生み出される一貫した物語であった。

この観点から、内的危険に対する防衛としての原抑圧は「翻訳の失敗」として論じなおされた。一次過程を二次過程に置き換える「翻訳」の試みが頓挫したとき、一次過程に手を加えず、それを利用することで記憶痕跡を意識から追放するという受動的な抑圧（＝原抑圧）が生じる。この記憶は、物語としての自我の統一性から切り離され、当初の強度を保ちつづけるのである。

このような「翻訳の残余」として生じるのが無意識という領域であり、精神分析におけるセクシュアリティとはこの処理を免れた記憶に由来する刺激作用である。翻訳という自己物語化の作業を頓挫させ、セクシュアリティに由来する外傷を引き起こすような体験は、体験とその理解の時間差によって規定されている。

初期の誘惑理論では体験に対する理解の遅延を生み出すのは思春期であったが、幼児のセクシュアリティの発見後、この区分を維持することは困難となる。これ以後、体験と理解の時間差は、幼児期の体験の一般的性質にまで敷衍されたかに見えるが、誘惑理論の放棄後に提起された「原幻想」の内容たる体験の類型性には、フロイトが性的外傷として想定した出来事の本質が示されている。

第5章では、のちに外傷を引き起こすような幼児期の性的体験を考察するために、J・ラプランシュによるフロイト読解を参照した。フロイトは誘惑理論の放棄後も、大人による身体の手入れそのものが子どもにとっての誘惑であるという視点を改めて支持した。ラプランシュは、フロイトが十分に展開しなかった翻訳モデルに着目し、これと世話としての誘惑という観点と結び合わせることで、独自の誘惑理論を提示する。

彼は、近年の乳幼児研究の知見（アタッチメント理論）に依拠しながら、生後まもなく保護者とのコミュニケーションに参加すること、さらにそれは主として非言語的な交流であるという知見を重視する。アタッチメントという自己保存のコミュニケーションはいわば、大人側の無意識がノイズのようにして混入するための基底コードであり、搬送波なのである。子どもは自己保存のコミュニケーションをつうじて大人の性的な無意識に遭遇し、それによって受動的な立場を強いられる。

本稿が採用したラプランシュによる精神分析理解は、身体の手入れこそが誘惑であるというフロイトの着眼を引き継ぎつつ、そこに大人の性的な無意識という要素を導入した。彼の議論によれば、体験された当時は理解できず、のちになって理解できるようになるという出来事は、人間にとって普遍的な状況（「人間学的な意味での根源状況」）にまで「一般化」されたのであった。このような精神分析の視点は、セックスに由来する欲望としての生殖行動のモデルにもとづく従来のセクシュアリティ理解に対して、まったく新しい観点を提示していることを論じた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、S.フロイトの精神分析学の再評価という視点から、セクシュアリティ概念を定位し直すことによって、今日のセクシュアリティ研究の地平を拡張しようという意欲的な社会学的論考である。

セクシュアリティはジェンダーとともに、20世紀後半の社会理論に大きな位置を占める重要な概念となっているが、人文・社会科学におけるタームの定着とともに、概念をめぐる厳密な議論は回避されてきた傾向がある。セクシュアリティを、「性的指向性」「性的快楽」「性的欲望」と言い換えは可能だが、「性的」という概念の定義がなされてこなかったためにそれは「無定義概念」であり続けてきた。本研究は、これまで多くの研究者から批判されてきたフロイトのセクシュアリティへの視座に着目し、フランスの精神分析家J. ラプランシュのフロイト理解を再解釈することによって、今日のジェンダー・セクシュアリティ研究の陥穽を乗り越える試みである。

本論文の社会学的研究意義は以下の二点である。第一は、セクシュアリティの概念規定の刷新に関わる方法論的・理論的貢献であり、第二は、それを通して今日の社会理論に新しい地平を切り開こうとする応用的な貢献である。

これまで社会学におけるジェンダー・セクシュアリティ研究を支配してきたのは、セックス（生殖器、性行為）をセクシュアリティの暗黙の前提にしてきた視点であった。これに対して、本研究は、この性器性に拘束された視点を解体することで、セクシュアリティをセックスから「離床」させようと試みる。たしかに先鋭的なセクシュアリティ研究は、それが近代西欧という特定の歴史的/政治的/文化的条件において構築された認識枠組であることを暴露したが、それが対象としてきたものは、生殖器の表象、同性または異性間の性的接触などであった。こうした発想・視点の前提にあるのがセックスに拘束されたセクシュアリティ観である。

近年、このようなセックスと直結したセクシュアリティ観に代わって、セクシュアリティを他者性と関連づけて定立する社会理論も登場している。それらは他者への欲望、親密性の希求などを「性的なもの」としてセクシュアリティの核心に位置づける。だが本研究は、こうした試みもまたセックスへの拘束を不可視化するものとして捉え批判する。それは「性に内在するヘテロ志向性を重視」する点で、論理的には異性愛主義であり、セクシュアリティと他者性をセックスで媒介させる点で、セックスに拘束されたセクシュアリティ観を抜け出していないというのである。

こうした傾向を批判したうえで、本研究は1897年以前、すなわちエディプス・コンプレックスの主張以前のフロイトの思想に注目して、生殖器に関わる諸現象や生殖行為の背後にある複雑なメカニズムに焦点をあてる。これを解明するために採用されたのが、ラプランシュの「一般誘惑理論」である。これはエディプス・コンプレックスに代わる精神分析の基礎理論として提出されたものであり、始原状態に存在する本質的で普遍的な知の産出構造を措定している。それによると、この本質的普遍的構造を

介して、たとえば言語を操作できない新生児は、大人の世界と直面する状況において両親の無意識の存在を認識し伝達することができる。この一般誘惑理論の応用によって、エディプス・コンプレックス的認識枠組と、セックスをすべての行動、思考、発達の起点に置くセクシュアリティ観の双方を同時に克服することが可能になったのである。

このようにして獲得されたセクシュアリティ観は、従来のジェンダー・セクシュアリティ研究を暗黙のうちに支配してきたセックス（生殖器と性行為）拘束モデルに対してどのような世界を切り開くことが出来るのだろうか？本論文は、この問いに対して、人文社会科学におけるジェンダー・セクシュアリティ研究の人間観と社会観の社会学的刷新という観点からその意義を提示した。これが本研究の第二の貢献である。生殖器・性的欲望・性的快楽といった一連の「性的なるもの」を、人間と社会理解の土台に据える社会理論は、いかに構築主義的性質を強調しようとも、セックス還元主義的本質主義の罠にはまってしまう。この罠から逃れるために、本論は、初期フロイト（とそれを再解釈したラプランシュ）の発想に依拠して、人間にとって普遍的な状況（「人間学的な意味での根源状況」）とその歴史的社会的構築性の折衝・接合の結節過程としてセクシュアリティを布置する視点を提起した。これによって、ジェンダー・セクシュアリティ研究を構造的に構築主義の側に位置づけると同時に、これまで視野から除外されてきた「普遍的な人間学的根源状況」を含んだ社会観・人間観を展望することが可能になったのである。

以上のように、本論文は、フロイトの精神分析についてのラプランシュ的解釈を通してセクシュアリティ概念を刷新しようと試みる挑戦的な論考なのだが、いくつかの克服すべき課題・難点も指摘できる。たとえばセックス拘束的セクシュアリティ観として本論文が批判してきたセクシュアリティ認識の問題点は指摘されているものの、こうした認識が歴史的に構築され果たしてきた理論的・社会的役割についての検討は十分ではなく、批判の対象として一方的に切り捨てている点は公正な批判とはいえない。しかし著者はこうした弱点については自覚しており、今後の研究の進展のなかで十分克服可能な課題である。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2015年9月25日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。